

第3章の注

注1 単位認定の基準としてポーズによる句切れ、PPUを利用した本研究では「ポーズ前イントネーション」と言った方が正確である。しかし、句末がほぼポーズの直前にあたるため「句末イントネーション」という名称を使うことにした。実際の談話では、少数だが次の例のような句の切れ目とポーズが一致しない場合もある。

「でもその子とかすごい食べてる↑(ポーズ) のにい△細くてえ△」(fdit62、fdit63)

ここでは句末ではなくても、ポーズ直前に現れたイントネーションは扱った。一方、句末でも直後にポーズのない箇所にも現れたイントネーションは基本的には扱わなかった。これらポーズ前以外の句末箇所のイントネーションについては、3-4-5で部分的に扱うにとどめた。

注2 被験者は新潟市内の専門学校日本語教師養成科の学生で、新潟市周辺市町村在住者である。当該地域では一部の単語に共通語と違うアクセントも聞かれるが、本調査の被験者の発話は、全体として東京圏共通語とほとんど変わらない。また、日本語教師養成科の学生ではあるが、アクセント型の聞き取りテストを見る限り、特に音調に対する聞き取り力が優れた特殊な集団だとは言えない。

注3 これらの資料は資料A11~13と同様、川田順造氏より寄贈されたもので、東京下町のタウン誌「たかばし」の取材時に行われたインタビューを録音したものである。

注4 「村岡花子調」という命名の初出は分からないが、金田一(1951)が補注2において、文末ではなく、分節単位に現れるイントネーションの例として「一昔前のラジオで、コードモノシンブンとして親しまれた村岡花子女史のコトバに現れたものは典型的なものである。」と述べ、以下の例を挙げている。

ツギワエ ヨンド チバケンノ アルウ オヒャクショーサンノ …
(ただし原文は縦書きのため、下線は文字の右側にあった)

また、第1章でも述べたが、秋永(1966)は「ガッコノセンセイ調」として、このような文節末

を短く高くする調子と文節末拍を長く「低から高に上げる型」を挙げているが、いずれも上記の例文に見られるようなものだと考えられる。つまり前者はコンドやチバケンノの箇所、後者はツギワァやアルウの箇所であろう。